銅像の前で、厳粛に斎行された中野正剛先生の顕彰祭

館　報
玄洋132号
平成31年1月1日
発　行
一般社団法人
玄洋社記念館
郵便番号 810-0062
福岡市中央区荒戸三丁目
6番36号
西公園ハイツ201号
電話（092）762-2511
FAX（092）762-2502

玄洋社憲則

第一条　皇室ヲ敬戴ス可シ
第二条　本国ヲ愛重ス可シ
第三条　人民ノ権利ヲ固守ス可シ

今号の主な内容

▽頭山翁はじめ玄洋社物故者の慰霊祭を斎行＝2面
▽司書公追悼会で博多人形披露＝3面
▽連載「西郷隆盛は征韓論者にあらず」＝4面
▽賛助会員芳名録＝5面
▽進藤勇理事ご逝去＝5面

「平成」最後の斎行

中野正剛先生を顕彰

福岡市が生んだ熱血政治家、中野正剛先生の顕彰祭が昨年十月二十日、福岡市中央区今川二丁目、鳥飼八幡宮境内の中野先生の銅像前で斎行された。

参列された富士フイルム社員の皆さん

「中野正剛先生顕彰会」の主催。中野先生の崇敬者はじめ玄洋社関係者、政界などからの約五十人が参列した。

山内圭司宮司を祭主に祝詞奏上、玉串奉奠などの神事で、東條英機の暴走と対峙した中野先生の偉業を顕彰し、慰霊した。

同顕彰会の吉村剛太郎理事長は、大勢の参加があったことに謝意を述べ「来年は天皇陛下が退位される。今回は、平成最後の顕彰祭となるが、顕彰祭は新たな年号の下で続く」と挨拶した。

式典の後、同宮参集殿に会場を移して直会（なおらい）が行われ、参加者は歓談のひとときをすごした。

小田原市からも社員研修で参列

同日の式典に、神奈川県小田原市にある富士フイルム㈱神奈川工場記録メディア研究所の研究マネージャー、市川智洋さん（44）ら社員五人も参列された。

社員研修の中の、歴史、文化を身につける「一般教養」の課程で、明治維新から明治時代をテーマに研究を進めると「玄洋社」に出合い、「ならば発祥の現地を見てみよう」と、中野先生の顕彰祭に合わせて来福された。

玄洋社墓地のある崇福寺（同市博多区千代）、廣田弘毅先生の墓所、聖福寺（同区御供所町）なども見学された。

「双十節を前に玄洋社の孫文支援を想起する…」

崇福寺で物故先覚慰霊祭

明道会

「頭山満翁並びに玄洋社物故者慰霊祭」が、昨年十月七日、玄洋社墓地のある福岡市博多区千代四丁目の「崇福寺」本堂で執り行われた。

一般財団法人明道会（山崎拓理事長）の主催。頭山満翁の命日十月五日前後に毎年、斎行される。

この日は、頭山翁の曾孫、頭山晋太郎氏はじめ玄洋社、明道会ゆかりの人など約三十人が参列した。

同寺執事、方谷源久師を導師に読経、参列者の焼香で玄洋社物故諸先覚を慰霊、顕彰した。

挨拶で、山崎理事長は「十月十日の双十節を前に、孫文の辛亥革命を支援した頭山翁はじめ玄洋社先覚のご遺徳を改めて振り返りたい」と述べた。

孫文が指導して中国・清朝を倒した辛亥革命は、一九一一年十月十日の武昌蜂起が導火線となった。日本に亡命し、革命運動に奔走する孫文を、頭山翁をはじめとして玄洋社の面々は物心両面にわたる強力な支援をした。

革命成功後の一九一三年（大正二年）二月十三日から、孫文はお礼のため来日した。三月二十三日まで三十九日間滞在し各地で大歓迎を受けた。

福岡市には二日間滞在。物故者の墓参などをした。

その一日、孫文は西職人町の玄洋社を訪れた。座布団もテーブルもない簡素な酒茶のもてなしを孫文は気に入り、社員と談笑したという。

厳粛に執り行われた物故先覚の慰霊祭

筑前風濤録

〈16〉

題字は進藤一馬福岡市長

頭山満と玄洋社

柳　猛直

試練の時代

鎮撫士は寺田屋に着くと、二階で決起の準備をしていた激徒の中から指導者の有馬新七、田中謙助等を階下に呼び出し、ひざ詰めの談判になった。

「とにかく錦小路のお屋敷へ来て大殿様（久光）の話を聞いてくれ」と伝えると有馬は「早速お伺いしたいが、われわれは宮（中川宮朝彦親王）のお召しがあって伺わねばならぬ」と断った。

奈良原は「君命である」と言ったが有馬は「宮の御用を承っておる」の一点張りで押し問答は続く。

この時、有馬が「地ごろィないがわかっか」と言って奈良原等が激怒したという話もある。久光は、ずっと鹿児島で育った地ごろ（田舎っぺ）だから天下の形勢がわかるかと言ったのだ。奈良原は

「われわれは上意討ちの君命を承って来ておるが、それでもよいか」

と念を押したが

「致し方ない」

という返事である。そのとたんに討手の道島五郎兵衛が

「上意！」

節信院　司書公らを追悼

大勢の参列の下で行われた司書公らの追悼会

福岡藩の勤皇派弾圧事件「乙丑（いっちゅう）の獄」＝慶応元年＝で犠牲になった家老、加藤司書公と諸烈士の追悼会が、司書公の命日の昨年十月二十五日、菩提寺の「節信院」（福岡市博多区御供所町十一）で行われた。

ご遺徳をしのんで檀家や崇敬者らおよそ百人が参列した。

喜納浩一住職の読経の中で参列者は焼香。祭文が読み上げられた。

邪気払いの居合の形のあと、筑前琵琶奏者、米村旭翔さんが「加藤司書」を、明暗流尺八無堂会の会員が「虚空鈴暮」を献奏。筑前今様道場宰都館の会員の方々が「加藤司書公」を献吟した。

恒例の明治維新史学会会員、力武豊隆氏の講演では第一次長州征討の一場面から、征長軍総督使者と司書公のやりとりを題材に「加藤司書公の沈黙」が語られた。

この日は、当代屈指の博多人形作家、中村信喬氏が五年がかりで作った「加藤司書公」の立像の披露もあった。

司書公の博多人形

銀シ西　「ココロ館」で頭山翁ら紹介

偉業を成した郷土の先覚たちの志は、地域の発展を願う銀行の業務にも通じる―と、西日本シティ銀行（本店、福岡市博多区博多駅前）の行員研修施設「ココロ館」（同市中央区鳥飼二）は、館内の「歴史文化サロン」に玄洋社の総帥、頭山満翁はじめ幕末・明治から昭和初期に、政治の分野で活躍した福岡の先覚の肖像写真や人物像、業績を紹介するパネルを展示している。

「郷土発展の礎を築いた偉人たち」のテーマで紹介されているのは、頭山翁のほかに福岡藩勤皇派家老の加藤司書や月形洗蔵、真木和泉、金子堅太郎、廣田弘毅、中野正剛、緒方竹虎で、玄洋社と縁の深い顔ぶれ。格調高いディスプレーが見る人の理解を深める。研修を受ける行員に見てもらい、学んでもらうという。

展示は、本紙に「玄洋社関係史料の紹介」を連載している石瀧豊美さん（福岡地方史研究会会長）が監修した。

行員研修が目的のものであるため、一般からの、展示に関する問い合わせや見学の依頼には応じていない。

先覚を紹介するパネル

と叫んで抜き打ちに田中謙助に斬りつける。田中は真っ向から額を割られて眼球が飛び出した。双方立ち上がって激しい乱闘になる。

討手は藩内でも聞こえた示現流の使い手ばかりである。討手の山口金之進の打ち下ろす刀で激徒の柴山愛次郎の首が飛んだ。

有馬新七は田中を倒した道島五郎兵衛に斬りかかったが打ち合った瞬間、刀が鍔元（つばもと）から折れて飛んだ。有馬は刀を投げ出すと素手で道島に飛びかかり、相手を壁に押しつけたが二人とも身動き出来ない。有馬は大声で叫んでいた。

「オイごと刺せ！オイごと刺せ！」

自分の背中を突き通して道島を刺し殺せというのだ。

若い橋口吉之丞は盟主として尊敬する有馬の絶叫に一瞬たじろぐのだが、刀を水平に構えると鋭い気合いとともに体ごとぶっつけるように有馬の背中を刺し通した。二人とも声も立てずに絶命したという。

すさまじい流血の乱闘が続いていたが討手の奈良原喜八郎は肌ぬぎになり、血まみれの上半身裸のまま大小を投げ出し両手を合わせて拝むような姿勢で

「頼む、頼む、やめろ、やめてくれ！」

と叫びながら階段を上がって二階にたむろして、あっけにとられている人々の中に入っていった。

一同、奈良原の気迫に押されて沈黙する。奈良原は

「有馬以下の者は君命に背いたから討ち取ったのであって諸君に対しては敵意はない。どうか京に行って大殿様に会って話を聞いてくれ」

と懇願した。皆、奈良原の言葉を粛然として聞いていた。

西郷隆盛は征韓論者にあらず ③

（昭和六十一年四月発行「玄洋」特別号外版より再録）

誤認の歴史を改めさす為に〈2〉

葦津珍彦

（前号から）

そこで、鎖国攘夷論から開国攘夷論へと大胆に急展開して、維新を断行して、国際社会に参加することになった。

この維新断行のころから、長い間の平和友好だった徳川幕府と韓国との外交も、やや穏やかでなくなっていた。徳川慶喜が、国際情勢の急変を告げて、使節を派遣しようとしたが、李王朝は、これに応じないまゝに、日韓外交は、維新政府に引き継がれた。維新政府は、徳川以来の深い関係があるので、対馬の宗藩をして、韓国との新外交を始めようとしたが、韓国の方では、日本の開国維新の気風を嫌って、事を進めなかった。外務省ではあまりに事が進まないので、直接、交渉することになった。これは対馬藩が、古くから長期にわたって、経済などでも韓国依存の政策をとっていたので、日本側の主張や意見を力強く伝達し討議しえなかったというような事情のあるのも認めねばなるまい。

しかし、それはそれとして、根本的な韓国の外交の精神は、日本が西欧風の開国政策をとって、東洋の旧風に反したという不信感にある。

韓国の側では「一切は二百年来の約定によるべきである。近来の日本人は、形を変じ、俗を変え、乗る所の船積も日本の旧様ではない（洋服を着て、洋船に乗ってくる）。こういう者は、国に入れられない。日本の国は、無法の国だから、韓人は法令を守って、かれらと交わったり商賣するのを禁ずる」というようなことを人民に公然と命ずる始末であった。外務省の花房義質の外交などでは、手がつかない。在留の居留民も商賣はできなくなり、日本の公館も食糧を断ち切られそうな形勢になって来た。要するに、韓国人の方は日本よりも二十年程度古くて、日本を洋夷に服した軽薄の奴らだとして、事実上の国交断絶の状況を生み出したということである。

これは、日本よりも一歩早く西欧との直接交渉を経験して、手厳しい傷を受けつゝあった清国人でさえも似たような感情があった。日本が特急コースで国際的近代化コースをとるのに深い違和不信感があった。現代人から見ると、この国交断絶状況になる当時の韓国の役人の非礼は、乱暴すぎる。

これに対して日本側でも、猛烈な反撥を生じて「断固として韓国の非を責めよ」とのいわゆる征韓論が、燃え上がって来た。一世紀の後の今日から見ると、国際近代化に対する清韓国人の自負と悠長さに対して、日本人の対応の島国的な敏感さ、性急さとの対立が東洋近代史の悲劇のムードを生み出したかに思われる。

西郷という人は、島国日本の英雄ではあったが、東洋的な重厚さのある大きな人物であった。かれは東洋近代化の急務を痛感しつつも、東洋文明の伝統を重んじた。韓国の態度を頑固とは思ったが、かれは燃え上がる征韓論にブレーキをかけて、韓国に対しては、あくまでも東洋の礼儀をもって、力強い説得の外交をすべきだと信じた。かれは明治六年五月のままの不快な状況での国交断絶を放任しておいてはならないとして、深く思案したのである。

対韓政策、閣議へ提出

この韓国との間に事実上の国交断絶状況の生じたころ、日本の外交は、かなりに繁忙であった。岩倉、木戸等の重鎮は遠く欧米諸国への訪問外交中で、留守の政府の最高責任者が、西郷隆盛だった。外交は副島種臣外務卿が直接の責任者で、西郷との信頼感は深い。副島卿は国際新知識も学んだが、もともと漢学の深い教養人で、北京に行ってもその漢学の深さなり、東洋的礼節の風格に接して、清朝の君臣から「これは東洋の文明人だ」と高く評価されたほどの人で、決してたゞの開明派的軽薄の才ではなかった。前年の明治五年には、横浜で奴隷船「マリヤルーズ号」を解放して国際的にも名声を得た。

清国およびロシアとの間にも懸念の問題があって、繁忙を極めていたが、政府の閣僚は副島外交を信任していた。しかし対韓外交が存外にトラブルが大きくなって来たし、これは外務省の一存では決しがたいとして、政府の閣議（参議をもって構成される会議）に、前途の方針についての決定を求める提案をした。これは当然の話である。

問題が閣議に提出されると、在野の強硬な対韓政策論を代表して、板垣退助、江藤新平などが、きびしい軍事的圧力政策の必要性を主張した。その主張するところは、もともとこれは、韓国が日本を侮って非礼外交をするのだから、日本の使節が、精鋭な護衛兵の一大隊でもひきいて行き示威外交をしなければならないというのだった。これは、かつて米国のペルリが、艦隊を連れて江戸幕府に対する示威外交をしたようなもので、当時の先進列強が、後進国との外交では、しばしば用いた軍事力利用の手段をとれ、というのであった。これが世にいうところの征韓論なのである。

（次号に続く）

賛助会員芳名録

（平成30年10月2日受け付け分まで・敬称略）

▼法人・団体の部

【三万円】

平野神社　（福岡市）
九星飲料工業㈱　（福岡県糸島市）

▼個人の部

【三万円】

松岡　武実　（姫路市）

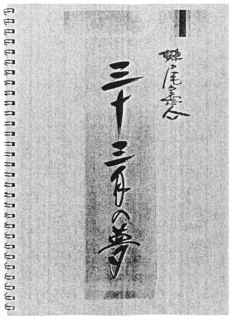
【一万円】

山座　和基　（福岡市）
伊東　聡江　（東京都）
塩川　隆三　（福岡市）
頭山　太郎　（立川市）
田坂　大蔵　（福岡市）
坂井　貞夫　（同）
安川　重臣　（同）
西口　英世　（埼玉県川越市）
長谷川真弓　（福岡県飯塚市）
片山　悠　（東京都東久留米市）
村井　正隆　（福岡県久留米市）
速開　正澄　（福岡市）
小川　勇二　（福岡県粕屋町）
飯島　健兒　（東京都）
樋口　吉朗　（埼玉県入間市）
日野　俊二　（筑紫野市）

妹尾元理事長の「遺稿」が冊子に

玄洋社記念館の故妹尾憲介・元理事長（平成八年、八十五歳で逝去）が残した日記風の遺稿が、子息で同記念館の妹尾俊見理事によって写真なども加え、B5判の冊子＝**写真**＝で刊行された。

憲介元理事長が福岡市議会議員を八期、三十二年務めたことから、孫文の支援者、宮崎滔天の半生伝の題名を借りて「三十三年の夢」。



福岡市政転換期の事柄などが詳しく記されており、自身も同市議を七期二十八年務めた俊見理事が「早く読んでおけばよかった」と述懐するほどの興味深い内容。「父の直筆のほうが父の思いが伝わるだろう」と遺稿の複写で作成されている。

五十部を作成して、憲介元理事長ゆかりの方などに贈呈した。

一部を紹介すると…。

妹尾元理事長は早稲田大学に入学した昭和六年から、中野正剛先生の書生塾「猶興居」に住んだ。

中野先生が、箱根「富士屋」ホテルで後の総理大臣、近衛文麿公に面会するのにお供。終わって「どんな人でしたか」と尋ねると先生、「オーン

進藤勇理事ご逝去

故進藤　勇氏

一般社団法人玄洋社記念館理事、中野正剛先生顕彰会理事の進藤勇氏は、かねて病気療養中のところ昨年九月二十九日午後四時五十六分、肺炎のため逝去された。八十一歳だった。

福岡市職員、福岡市選挙管理委員会委員長などを務められた。夫人の洋子様（故人）は玄洋社記念館創設者で元福岡市長、故進藤一馬先生の長女。

平成二十二年一月に、福岡市からご子息が住む東京・府中市に転居された。

お前にちょっと気のきいた人ぢゃったやね…笑い」の答えだったと記されている。

市議会議員一年目。長浜に移転した鮮魚市場が、中央突堤未完成のため十メートルの風でも荷役ができず、上京して時の河野一郎農林大臣に面会し直訴。「来年やってやる」と約束を取りつける。帰りに副議長から「あんたもやることァやるナー、と言われたことを憶えている…」。「議員一期生初仕事」と一言添えられている。

建設コンサルタンツ
建設事業の計画・調査・測量・設計・施工管理
ジーアンドエス・エンジニアリング株式会社
代表取締役会長　花田　勲
代表取締役社長　児玉和久
本　社　福岡市博多区東比恵三丁目二四－九
〒八一二・〇〇七電話（092）481－3100
東京支社　東京都杉並区高円寺南一－二三－一
〒一六六・〇〇三電話（03）5378－5800
営業所　千葉・浦和・神奈川・山口・佐賀・北九州・大分・長崎

福岡鮮魚市場のコア企業!!　21世紀の水産業界を領導するアキラグループ
◇鮮魚仲卸業◇
株式会社　アキラ水産
代表取締役社長　安部泰宏
本　社　福岡市中央区長浜3丁目11－3－711
電話092－711－6601（代表）
関連会社／株式会社コウトク水産
AKIRA
Oh, Fresh! Sea foods.

損害保険コンサルタント
太宰府天満宮前駐車場
漢方薬相談　とおりゃんせ
㈲日産企画　大江田信
薬剤師　大江田美子
〒818-0117
太宰府市宰府三丁目四－二十一
☎〇九二－九二四－六二九六

造園・緑化　自然とコミュニケーション
株式会社　別府梢風園
代表取締役社長　別府壽信
本　社　〒813-0025
福岡市東区青葉一丁目六－五三
TEL〇九二－六九一－〇六七八(代)
FAX〇九二－六九一－四五五四
E-mail：info@shoutien.co.jp
BEPPU

(財)日本医療機能評価機構認定
開放型病院・臨床研修指定病院
原土井病院
理事長　原寛
〒813-8588
福岡市東区青葉6丁目40番8号
☎092-691-3881(代)
http://www.haradoi-hospital.com/
HARADOI HOSPITAL

玄洋社関係史料の紹介

同時代から見た頭山満 ⑱

ー書と人物ー

石瀧　豊美

第74回

（前号から続く）

『天下之怪傑　頭山満』の「（三十三）頭山満の家庭」には「住居の変転」の項がある。頭山満の住所については、今後きちんと見極めたいと思うが、まずはその部分を引用してみよう。

「頭山満は、世人に怪傑とまで持囃されて居る位だから、生活の方法も一風変って居る。即ち浪人生活である。頭山満程生活に変化のあったものはあるまい。幼少の折は父母の膝下に生育したが、十九歳にして頭山家に入り、ここに姓を改め、次に親戚の下駄店に同居を命ぜられ、後幾何もなく福岡平尾山に入り、其後諸国を流浪し、或時は福岡御所ヶ谷に隠遁し、或は地行に居を定め、殆んど席暖まるに暇なしと云う有様であった。彼の有名なる、霞ヶ関爆裂【弾】事件の少し前、東都に入り、大阪に去り、東京に出でた。京橋弥左衛門町に、多数の書生を養うて、仮住居をして居ったかと思えば、浜の家・枡田屋の待合籠城をなし、時々上野根津の神泉亭に隠れ、後ち牛込納戸町に居を定め、又麹町に大構えの家を借りて、多数の幹分【こぶん】を養い、後ち赤坂榎坂町に移り、或は麹町・永田町に移った。

頭山は、目下赤坂霊南坂に居を定めて居る。ここはお気に入ったと見えて、比較的永続きして居る。…門には主人自書の「頭山満」てふ【と言う】古ぼけた標札が掲げられてある。」（一八八～一八九頁）

霊南坂在住時に関東大震災の被害に遭い、火災によって私財を失うことになった。その後、赤坂常盤松に居を移し、晩年を過ごすのである。この常盤松という町名は昭和三年（一九二八）から常磐松に変わるが、それは「皿」は割れやすいので、丈夫な「石」に変更したのだ、と言う。

ところで、『天下之怪傑　頭山満』口絵には頭山満の自署が掲載されている（**写真1**）。ここにたまたま二つの印が押されているが、これは蔵書印と言ったもので、頭山満の自署とは関係がない。

「内交」は内務省交付本を意味する。発行日の六日後、「明治四十五年六月二十四日」に当時の出版の制約によって、発行された図書の一冊が出版社から内務省に納められ、それが当時の帝国図書館に「交付」（移管）された。「帝国図書館蔵」の印も押されているが、帝国図書館は国会図書館の前身である。後に国立国会図書館に引き継がれ、現在にまで残されたのである。同書は現在インターネットで公開されているので、国立国会図書館デジタルコレクションで検索すると、パソコン上に画像を表示できる（**写真1**はこれによる）。

写真1

写真2

写真1は、これが明治四十五年六月以前の比較的近い時期に書かれたと推測できるという点で興味深い。竹筆を使い始める前のことであり、どちらかと言えば優雅な筆跡と言える。ふつうに目にするものは、「頭」が典型的な草書、「山」がどっしりとした楷書、「満」が草書をさらに花押のようにくずした印象を受ける文字となっているが（**写真2**）、**写真1**は筆の動き方は**写真2**とほとんど変わらないものの、全体に受ける印象はかなり違う。雄渾さよりは優雅さが優っているのである。頭山満はうまい字を書けるのだが、後にはあえてそのうまさを崩していったのではないか、というのが私の仮説だが、頭山満の字の変遷を追いかける上で、**写真1**は貴重な資料である。

写真2は最近、濱地光男氏よりご提供いただいた史料写真から、頭山満の署名部分を切り取ったもの。昭和十二年十二月二十九日に署名したことが確定できる点でこちらも貴重である。**写真2**では特に「満」の縦棒三本、最後にボテボテと打たれた二つの点に特色がある。**写真1**ではまださんずいが残っている。**写真2**は誰にも真似のできない独特の「満」である。掛け軸、扁額、記念碑などでもよく目にする。